

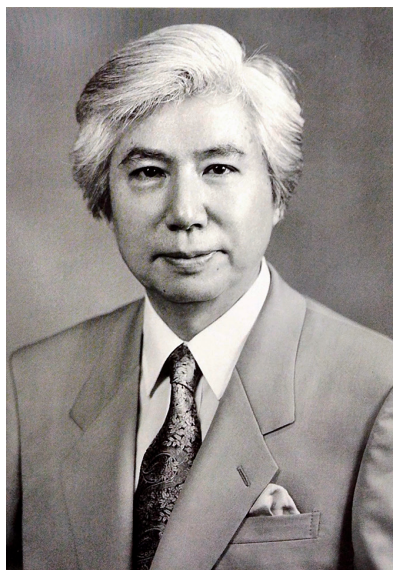


Title	小泉進先生を偲んで
Author(s)	浦井, 憲
Citation	大阪大学経済学. 2025, 74(4), p. 64-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100644
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



小泉進先生を偲んで

1981年4月、筆者が大阪大学経済学部経済学科に入学した当時、小泉進先生は本学の経済学部部長を務めておられ、そしてまた経済学部生にとって最も重要な必修科目である『経済原論』を担当しておられました。その意味で、筆者にとって小泉先生は初めての「大学の先生」の記憶であり、また初めて精緻な「経済学理論」に触れた記憶そのものでもあります。加えて、自身その後大変お世話になった永谷裕昭先生、久我清先生といった純粋理論経済学の先生方、その出身ゼミの先生でもあります。そのようなことから、今日の経済学研究科スタッフを代表し大阪大学経済学での追悼記事を書かせていただくということに、甚だ僭越と畏れながらも、以下小泉先生のご業績を振り返りつつ、筆者がその役割を務めさせていただきますこと、お許しいただきたく思います。

小泉進先生は1929年8月に神戸市でお生まれになり、1949年3月に灘高等学校を卒業後、大阪大学法経学部に進学され、1953年3月に卒業されました。卒業後すぐに大阪大学法経学部の助手、1954年にアメリカ・ミシガン大学での研究助手ならびに大学院への入学、1958年6月にはミシガン大学からPh.D.学位を授与され、同年8月に大阪大学経済学部の講師として復帰されました。その後1960年に助教授、1964年にはペンシルベニア大学ワートン・スクールの客員准教授として渡米、1年間の任期を務められ、帰国後1969年4月に大阪大学経済学部教授に就任されました。1979年に経済学部長、1981年までその職務を果たされ、1993年3月に大阪大学を定年退職された後は帝塚山大学に移られ、大阪大学および帝塚山大学の名誉教授の称号が授与されています。

小泉先生は、計量経済学モデルの発展に貢献されました。先生のご研究は、政府支出などの政策手段がどの程度経済成長に影響を与えるかを考察するもので、政府が経済をある程度コントロールできるというケインズ経済学的な発想がその基盤となります。小泉先生が本格的に研

究生活に入られた 1950-60 年代は、まさに市場経済を計量化し、予測に基づいて不況の回避や経済成長を促進する方法を模索しようとする世界的な大きな流れの下にありました。そうした中、小泉先生もまた日本経済の動向を分析し、政策効果を検証する研究を行われました。特に師である Lawrence Klein 先生が米国で行っていたような計量モデルを活用した研究に注力され、経済予測や政策の効果分析に取り組んでおられたことが、小泉先生の研究業績の重要な側面となっています。その成果の一部は、1964 年 *International Economic Review* 誌に掲載された論文 “A Priori Information and Time Series Analysis: A Review Article” 等に結実しております。

小泉進先生は 1979 年 7 月から 1981 年 7 月まで大阪大学経済学部長として、優秀な人材を集める強力な経済学部を目指して活動されました。冒頭にも述べた筆者の大学入学時期にも当たっていますが、その当時、本学の理論政策系では林敏彦氏、中谷巖氏、本間正明氏、植田和男氏、井堀利宏氏や林文夫氏、猪木武徳氏、蛸山昌一氏など、極めて強力な人材が集まっておりました。優れた若手人材の早期の教授昇進を可能とするため、小泉先生は大講座制の導入が不可欠と判断され、総長の山村雄一氏にも協力を依頼。結果、大学側の全面的なバックアップのもと文部省との協議が成功し、全国的にも最早期における大講座制の採用が可能となりました。

小泉先生は、教育活動にもまた非常に熱心に取り組まれました。大学紛争の激しかった 1960 年代末から 70 年代初め、教員は単なる研究者ではなく教育者としての責任を強く自覚すべきと考えるようになられたと伺います。小泉先生の『経済原論』は、岩波の『価格理論Ⅰ』と『所得分析』を教科書とし、科学としての経済学の方法論を導入としながら、Edgeworth Box から入った厳密なミクロ理論と、古典派およびケインズ理論の対比に基づく実践的マクロ理論の優れた展開および調和という、近代経済学の入門講義として当時に望まれる最高レベルのものであったと思います。小泉先生の原論を出発点に、林敏彦先生のミクロ、中谷巖先生のマクロ、本間正明先生の財政政策、植田和男先生の金融政策と続いた往時の理論政策系カリキュラムは、今日にして思えば圧巻そのものであり、その時代に大阪大学で経済学理論を学ぶことができたことの幸運を思わずにおれません。同時にその後の本学部に於いて、当時に匹敵する魅力あるカリキュラムが実現できたかどうか。この 30 年は大学を取り巻く事情も大きく変わりましたが、そのことを差し引いても、もし力及ばずであるとするならば、その責任の一端を担う者として、改めて自己を不甲斐なく思わずに居れぬ次第です。

研究・行政・教育の面から大阪大学経済学部発展へ多大な貢献をなされた小泉先生に感謝を申し上げつつ、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(浦井 憲 大阪大学大学院経済学研究科教授)